
原 著

福島原発事故後県外避難を経験した乳幼児を育てている母親の思い —避難前・避難中・福島県に戻ってから—

小川 紀子

The Thoughts and Feelings of Mothers Raising Babies and Children Who Evacuated After the Fukushima Nuclear Disaster: Before and During the Evacuation, and After Returning to Fukushima

Noriko Ogawa

キーワード：福島原発事故, 県外避難経験, 乳幼児, 育児, 母親

key words : Fukushima nuclear disaster, experience of evacuating from Fukushima, babies and children, child-rearing, mother

Abstract

The aim of this study was to investigate the thoughts and feelings of mothers who evacuated to other prefectures in the wake of the Fukushima nuclear disaster, during three periods: before evacuation, during evacuation, and after returning to Fukushima Prefecture. Semi-structured interviews were conducted for later qualitative analysis with seven mothers who were raising babies and children initially when they evacuated to outside of the prefecture. Due to widespread panic and anxiety about the level of radiation that was not lessened by the complexity and changing nature of the data supplied by the government, the information provided by the mothers in the community convinced them that any radiation would harm their young children. This prompted them to evacuate as a protective measure. During the evacuation period, in addition to the difficulties caused by their sudden move to an unfamiliar location, they endured the hardships of living separated from other family members while raising their children alone, as well as struggling to fit in socially. After returning to Fukushima, they experienced another struggle in human relations with mothers who had not evacuated. They were also worried that their children might be subjected to discrimination. Their fears about the risk that radiation posed to their children's health is what motivated them to adopt various protective measures, but this resulted in their being unable to give their children the kind of safe and stable life that children need to thrive. I conclude that the thoughts and feelings of mothers who had returned to Fukushima from evacuation to other prefectures need to be well understood. Supporting them by sharing their concerns while providing necessary information on radiation based on this understanding is desirable.

受付日：2018年2月10日 受理日：2018年9月18日

日本赤十字看護大学大学院 Japanese Red Cross College of Nursing Graduate School

要 旨

福島原発事故後県外へ避難前、避難中、福島県に戻ってからの3時期における母親の思いを明らかにすることを目的とし、県外へ避難当初乳幼児を育てていた母親7名を対象に、半構成的面接を行い質的に分析した。避難前では、【放射線に対する不確かさ】のなか、周囲の母親からの情報等から【子どもにとって放射線は害という確信】をし【子どものために避難を決意】した。避難中では、【環境が変化したことへの苦勞】の中、家族と離れて育児や生活する辛さや【人間関係の悩み】を抱えていた。福島県に戻ってからは、避難経験のない母親との【人間関係の悩み】や【子どもが受けるかもしれない差別への不安】を抱え、【放射線による健康被害への不安】から【子どもの安全を守るための対処】をしていたものの、子どもらしい生活をさせることができない状況にあった。以上から、県外避難から戻った母親の思いを理解した上で、放射線に関する必要な情報を提供しつつも考える支援の必要性が示唆された。

I. はじめに

2011年3月11日の東日本大震災（以下、大震災とする）に伴う福島第一原子力発電所事故（以下、福島原発事故とする）により、子どもへの放射線による健康被害を懸念し、県外避難を選択した母親がいる。これらの母親の多くは、父親を福島県内に残しており（成井, 2012）、特に乳幼児を育てている母親の負担が大きい（福地, 2012）と言われている。放射線による子ども・子育てへの影響など過去にない課題（木脇・久保田, 2013）となっていることから、福島県に戻ってきても放射線のことは口に出せない（八代, 2013）、あるいは、低線量被曝による健康影響に対する捉え方の相違、すなわち、気にする派と気にしない派にわかれ、お互いに話さえできなくなってしまった状況（吉田, 2013）という、福島原発事故による母親同士の人間関係の変化が挙げられる。こうした中で、福島県から委託を受けたNPO法人ビーンズふくしまは、母親向けサロン「ままカフェ」を開催し、母親達が放射線に関する不安や悩みなどを話せる場を提供し、県外避難経験のある母親を対象とした支援を継続して行っている（ふくしま子ども支援センター, 2017）。

乳幼児期は、子どもの心身の発育・発達において重要な時期である。この時期に、福島原発事故により県外避難を経験した母親は、避難前、避難中、福島県に戻ってからのという時間的経過の中で様々な思いを抱えていると考えられる。このような母親の思いを、時間的経過を追って明らかにしている文献は見当たらない。そこで、乳幼児を育てながら県外避難を経験した母親の思いを明らかにし、今後の母親への支援を検討する手立てにしたいと考えた。

II. 研究の目的

本研究は、福島原発事故後に福島県外へ避難前、避

難中、福島県に戻ってからのという3時期における乳幼児を育てていた母親の思いを明らかにし、福島原発事故後に福島県外へ避難を経験した母親への支援を検討することである。

III. 用語の定義

母親の思い：福島県外へ避難当初、乳幼児を育てていた母親が育児や生活の中で抱いた気持ちや考え、感情とする。

IV. 研究方法

A. 研究デザイン

本研究では、福島原発事故後に福島県外へ避難前、避難中、福島県に戻ってからのという時間的経過の中で母親がどのような思いを抱いていたのかを半構成的面接により明らかにするため、現象の率直な記述が求められるときに有用とされる（Sandelowski, 2000/2013）質的記述的研究を用いた。

B. 研究依頼機関

福島原発事故後に福島県外へ避難し、その後県内に戻り育児をしている母親向けサロンを運営している福島県内の機関とした。

C. 研究参加者

福島原発事故後に福島県外へ避難し、その後県内に戻った、避難当初乳幼児を育てていた母親7名とし、研究協力の同意が得られた者を研究参加者とした。

D. データ収集期間

本研究のデータ収集は、2014年5月～8月に行った。

E. データ収集方法

半構成的面接は、インタビューガイドに基づいて、福島県外へ避難前、避難中、福島県に戻ってからのそれぞれの時期ごとに分け、福島原発事故による放射線の問題が起こった中で、どのような思いを持ちながら育児や生活をしてきたのかという質問内容を中心に研究参加者に尋ねた。また、研究参加者がその質問

に答えにくい場合には、子どもや食生活について等具体的な質問内容による問いかけを行った。なお、インタビュー内容は、研究参加者の同意を得た上でICレコーダーに録音した。

F. データ分析方法

半構成的面接によって得られたデータから逐語録を作成した。母親の思いを時間的経過に沿って語られている内容に注目して、母親の語りの主題となるところで区切った。次に、その内容の類似点・共通点とその関係性を事例ごとに整理しサブカテゴリーにし、全事例のサブカテゴリーの類似点・共通点からカテゴリーを抽出した。分析内容は、質的研究に詳しい研究者のスーパーバイズを受け信頼性と妥当性の確保に努めた。

G. 倫理的配慮

研究依頼機関の担当者に、文書と口頭にて説明を行い、研究協力への同意を得た。その後、研究者が研究依頼機関の運営している母親向けサロンに赴き、参加している母親に対して依頼文書等を配布し、口頭にて研究内容を説明した。説明後、研究参加の意思を示した母親に対して、インタビュー日程等の調整を行った。インタビュー当日に研究の趣旨や研究協力の自由意思、研究結果の公表等について書面と口頭にて再度説明を行い、同意書に署名を得た。また、インタビューに応じることによる疲労感や不快感のほか、避難前から現在に至るまでの辛い経験を思い出すことによる精神的負担とならないように、質問に答えたくない場合には答えなくてもよいことを伝え、インタビュー中は研究参加者の様子を観察しながら適宜確認を行った。なお、本研究は、長野県看護大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：2014-2）。

V. 結果

A. 研究参加者の概要（表1）

避難当初の研究参加者の平均年齢は33.7歳（SD±4.9, 最大39, 最小23）であり、初めて育児をしているものは2名だった。職業は、育休中だった事例G以

外専業主婦だったが、事例D・Fは避難中仕事の経験があった。また、家族形態は全員核家族であり、夫を県内に残して避難していた。避難前の居住地は全員避難指示区域以外であり、自主避難という形をとっていた。避難期間は最大約3年1か月から最小約1年だった。なお、インタビュー平均所要時間は1時間32分（最大2時間20分、最小1時間）だった。

B. 全事例からみた母親の思い

避難前、避難中、福島県に戻ってからの3時期における母親の思いは、子どもに対する思いと母親自身に関する思いに大別された。子どもに対する思いは、母親として子どもを守り育てるという母性が根底にあった思いであり、母親自身に関する思いは、母親自身が置かれている環境や生活背景から生じた思いだった。以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを〈 〉, 母親の語りを斜字で示す。なお、母親が使用している放射能という言葉は、日本ではしばしば、放射線と混同されて用いられている（畑村・安部・淵上, 2013）と言われているように、語りの意味から人体に影響を及ぼす放射線を示すものと考えられるが、そのまま用いることとする。

1. 子どもに対する思い

a. 避難前の子どもの思い（表2）

避難前では、6カテゴリー、13サブカテゴリーから構成された。

大震災後、福島原発事故による放射線の問題が生じた。周囲の母親からの情報や動きから、【子どもにとって放射線は害という確信】をした母親は、【子どものために避難を決意】していた。避難したくても、出産直後で体調が回復していない、また、〈小さい子どもを連れて避難することは無理〉な状況から、すぐに避難できなかった母親は、【避難できない苦しさ】の中で、【放射線による健康被害への不安】を抱えていた。そして、食生活に気をつける、外に出すことを控えるといった【子どもの安全を守るための対処】をしていた。しかし、〈子どもの行動をどこまで制限すればいいのか判断できない〉という【子どもを放射線から守るための判断への迷い】が生じていた。

表1. 研究参加者の概要

研究参加者	A	B	C	D	E	F	G
年齢	30代	30代	30代	20代	30代	30代	30代
家族構成	夫 長男	夫 長男 次男 三男	夫 長女	夫 長女 長男	夫 長男 長女	夫 *長男 *次男 長女	夫 長女 次女
避難期間	約3年	約2年	約2年10か月	約2年2か月	約1年	約3年1か月	約2年6か月
インタビュー 所要時間	2時間20分	1時間00分	1時間10分	1時間07分	1時間40分	1時間40分	1時間05分

注) 年齢および家族構成は避難当初のものであり、*は学童児を指す。

表2. 避難前の子どもに対する思い

【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉
子どもにとって放射線は害という確信	子どもにとって放射線はよくない
子どものために避難を決意	子どもを放射線から守るために避難しよう 将来子どもに影響があったら後悔するから避難しよう
避難できない苦しさ	避難したいが避難できないやせなさ 避難を断念しなければならない辛さ 小さい子どもを連れて避難することは無理
放射線による健康被害への不安	子どもへの影響があるかもしれない 子どもへの影響がわからないことへの不安 放射線から身を守るような環境は子どもの成長によくない
子どもの安全を守るための対処	放射線から子どもを守りたい気持ちが強い 子どものために食生活に気をつけた 子どもを外に出せなかった
子どもを放射線から守るための判断への迷い	子どもの行動をどこまで制限すればいいのか判断できない

このうち、【子どもにとって放射線は害という確信】では、「(中略) 携帯の方に友達とかから、マスクを買わなきゃいけないとか放射能が危ないっていう話で(中略) ここまで飛んできちゃうのってその時に初めて知って。(E)」と語り、〈子どもにとって放射線はよくない〉と確信していたことが示された。

b. 避難中の子どもに対する思い (表3)

避難中では、10カテゴリー、20サブカテゴリーから構成された。

子どもを放射線から守るために避難しても【放射線による健康被害への不安】が生じていた。また、子どもにとって放射線は危険であることを認識した母親は、避難中であっても、子どもの食生活に気をつけるという【子どもの安全を守るための対処】をしていた。さらに、母親の中には、〈子どもが新しい環境に馴染めるか心配〉といった【子どもの生活環境への適応の悩み】や避難によって子どもを振り回しているといった【子どもに対する申し訳なさ】、【放射線についての子どもへの説明の悩み】を抱えていた。こうした思いの中でも、母親は、子どもを放射線から守るために【避難継続への決意】を固め避難生活を続けていた。

子どものことを思い避難生活を続けていたが、家族一緒に暮らしたいという子どもの希望や、子どもの小学校入学という時期を考え、【福島県で暮らすことへの決意】をし、福島県に戻ることを決めていた。しかし、【福島県で暮らすことへの決意】をしても、〈福島県は放射線があるから子どもへの影響が不安〉といった【福島県に戻ることへの不安】を抱いていた。一方、避難生活を送る中で、【子どもらしい生活をさせる】環境を得ていた。また、〈子どもを放射線から守れるのは母親の自分しかいない〉という【母親役割への気づき】をしていた母親もいた。

このうち、【放射線による健康被害への不安】では、

「食べ物が危ないっていうふうになってきて(中略) 初めてのその離乳食ももうどうしていいかわかんなくって、(中略) (避難先の) 県産でも危ないんじゃないかとかあって離乳食が全然進まなかったのは覚えてますね(A)」と語り、〈放射線の心配から離乳食ができなかった〉ことが示された。また、【子どもらしい生活をさせる】では、「なによりもこの子(長女)を公園で普通に遊ばせた時に、(避難先に)来てよかったんだって思った。(F)」と語り、〈放射線を気にすることなく子どもを外で遊ばせられた〉環境を得ていたことが示された。

c. 福島県に戻ってからの子どもに対する思い (表4)

福島県に戻ってからは、7カテゴリー、21サブカテゴリーから構成された。

放射線の問題が解決していない福島県に戻ることに、【放射線による健康被害への不安】や【子どもが受けるかもしれない差別への不安】を抱えながら、【子どもの安全を守るための対処】をしていた。しかし、【子どもを放射線から守るための判断への迷い】や【放射線についての子どもへの説明の悩み】が生じていた。さらに、子どもの検査結果等十分な情報が得られないという【子どもに関する専門的な情報提供への不満】を持っていた母親もいた。一方、〈子どもを放射線から守るために自分ができることを精一杯する〉という【母親としての決意】をしていた母親もいた。

このうち、【放射線による健康被害への不安】では、「(子どもが親世代になった時に) 子どもがちゃんと生まれなかつたりとかね、そういうのあったりしたら、ああやっぱりみたいなのがすごいありますよね。(E)」と語り、〈福島県にいて子どもに影響があるかもしれない〉という健康被害への不安が示された。また、【子どもが受けるかもしれない差別への不安】で

表3. 避難中の子どもに対する思い

【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉
放射線による健康被害への不安	放射線の心配から離乳食ができなかった
子どもの安全を守るための対処	子どものために食生活に気をつけた
子どもの生活環境への適応の悩み	子どもが新しい環境に馴染めるか心配 子どもに友達ができない悩み
子どもに対する申し訳なさ	子どもを振り回している申し訳なさ 子どもにストレスを与えているのは自分のせいかもしれない
放射線についての子どもへの説明の悩み	子どもに放射線について説明できないもどかしさ
避難継続への決意	子どもを放射線から守るために避難を続けよう 子どもらしく生活できない福島県には戻れない 子どものために放射線の心配のない場所で避難を続けよう 夫のことは心配だが子どものために避難生活を続けよう
福島県で暮らすことへの決意	子どもの気持ちを尊重して福島県に戻ろう 子どもの学校が始まるから福島県に戻らなければならない 県外避難した子ども達が福島県に戻って来ているから大丈夫だろう
福島県に戻ることに不安	福島県は放射線があるから子どもへの影響が不安 福島県は放射線があるから子どもの食生活が不安 放射線がある福島県で出産する不安
子どもらしい生活をさせる	放射線を気にすることなく子どもを外で遊ばせられた 子どもを遊ばせられる環境があり助かった
母親役割への気づき	子どもを放射線から守れるのは母親の自分しかいない

表4. 福島県に戻ってからの子どもに対する思い

【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉
放射線による健康被害への不安	震災時に子どもを被爆させてしまったかもしれない 子どものために避難し続ければよかったかもしれない 子どもの行動が気になる 子どもの安全性が確認できない 福島県にいて子どもに影響があるかもしれない 子どものために線量の低い場所に避難したい
子どもが受けるかもしれない差別への不安	福島県で育ったことで他者から差別を受けるかもしれない
子どもの安全を守るための対処	子どものために食生活に気をつけている 子どもの外遊びのために安全な場所に行く 子どもの環境を考えて線量計で確かめる 子どもの外にいる時間を制限している
子どもを放射線から守るための判断への迷い	放射線で子どもがしてはいけないことを判断できない 除染した場所とはいえ遊ばせてもいいのかわからない
放射線についての子どもへの説明の悩み	子どもに放射線についてどう説明したらいいのか悩む 子どもに福島県が安全なのか判断できず説明ができない 子どもに放射線について話す時期が決められない
子どもに関する専門的な情報提供への不満	子どもの放射線に関する情報が定期的に流れていない 小児科医が説明してくれない 子どもの検査結果を公表してくれていない 子どもの検査結果に相違があることに不信感がある
母親としての決意	子どもを放射線から守るために自分ができることを精一杯する

は、「福島出身だからという理由でその結婚を反対されたりとか（中略）子どもがもしできにくかった時に（中略）放射能浴びたからじゃないとかそこに行きついてしまったり（中略）もし障害を持った子が生まれた時に（中略）遺伝子がどうのこうのとかって言

われたりとか。（A）」と語り、〈福島県で育ったことで他者から差別を受けるかもしれない〉という不安が示された。さらに、【子どもに関する専門的な情報提供への不満】では、「（小児科の先生に相談しても）本当にことを言ってくれない、本当のことは隠してい

表5. 避難前の母親自身に関する思い

【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉
震災直後の生活の大変さ	生活していくことに必死 外出先から避難する大変さ 被害の大きい自宅にいる不安
放射線に対する不確かさ	放射線のことはよくわからない 放射線のことは意識できない
避難することへの決意	よい避難先が見つかったから避難しよう 自分の身体が回復してきた今しかない
避難することへの不安	ガソリン不足による避難への心配 知らない地に避難することへの不安
避難することへの迷い	避難せずに頑張った方がいいのかもしれない 家族が離れて生活することが本当によいことなのかわからない
家族と離れることへの辛さ	夫と離れて避難生活を送る不安 夫を残して避難する罪悪感
放射線への恐怖	放射線が怖くて外に出られない 再爆発して汚染が進んだら怖くて仕方ない
放射線による生活の不自由さ	普通の生活ができないもどかしさ 放射線のことを考えて生活する負担

る。血液検査が必要かどうかも聞けない。(E)」と語り、〈小児科医が説明してくれない〉、「避難区域になっているところは血液検査しているはずなのに、(中略)子どもの血液検査を求めてるけど、やってもらえないのは怪しいし不安。データ公表されないから余計に不安だし情報がなさすぎて不安。悪い結果でもきちんと公表してほしい。(E)」と語り、〈子どもの検査結果を公表してくれていない〉ことへの不満が示された。

2. 母親自身に関する思い

a. 避難前の母親自身に関する思い(表5)

避難前では、8カテゴリー、17サブカテゴリーから構成された。

大震災によって、食料や飲料水の確保といった【震災直後の生活の大変さ】に直面した。こうした中で福島原発事故が起こった。母親は、〈放射線のことはよくわからない〉といった【放射線に対する不確かさ】のなかで、【避難することへの決意】をしていた。しかし、その決意に至るまでには、【避難することへの不安】や【避難することへの迷い】、【家族と離れることへの辛さ】が生じていた。避難できずにいた母親は、〈再爆発して汚染が進んだら怖くて仕方ない〉といった【放射線への恐怖】や〈普通の生活ができないもどかしさ〉といった【放射線による生活の不自由さ】を抱えながら生活していた。

b. 避難中の母親自身に関する思い(表6)

避難中では、10カテゴリー、28サブカテゴリーから構成された。

避難したことによって、【環境が変化したことへの苦労】を抱えていた。また、避難生活の終わりという【先が見えない生活への不安】や、放射線から逃れる

ために避難しても、【放射線への恐怖】が生じていた。母親は、こうした苦労や不安、恐怖だけでなく、【家族と離れて避難生活することへの辛さ】や、家族の支えを得ることができず、【避難しながら育児する辛さ】を感じていた。さらに、避難したことによる【人間関係の悩み】もあった。こうした中でも、放射線は子どもにとってよくないと考え避難生活を送っていた。しかし、心身の限界を感じ、家族と一緒に暮らすために【福島県で暮らすことへの決意】をしていた。【福島県で暮らすことへの決意】したものの、【福島県に戻ることに不安】や【福島県に戻ることに切なさ】が生じていた。そのような避難生活を送る中でも、【避難生活の中での救い】を得ていた母親もいた。

このうち、【放射線への恐怖】では、「放射線ってことはすごく怖くて。情報の錯綜もあって。何が正しいんだかどう自分がしているのかが本当にわかんなくて。(中略)全然眠れない日々ばかりで(中略)(夜中)不安になって。(A)」と語り、情報の錯綜によって、〈どの情報が正しいのかわからない放射線そのものへの恐怖〉が生じていたことが示された。また、【人間関係の悩み】では、「避難で〇〇(避難先)にいますっていうのは言わなかったですね。それはやっぱり差別されるんじゃないかっていう恐怖があって。そういう白い目で見られたくないから(A)」と語り、〈避難したことで差別を受けたくない〉という思いが示された。一方で、「(精神的に不安定になったのは)友達がいないことですよね、やっぱり。(D)」と語り、〈自分のことを知っている友達がいない〉という【人間関係の悩み】を抱えていたものの、「(中略)避難してたっていう人が多かったから(中略)みんな

表6. 避難中の母親自身に関する思い

【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉
環境が変化したことへの苦勞	経済的にも心理的にも支援を受けられない大変さ 二重生活による経済的負担 避難先と福島県を行き来する大変さ 限られた空間で生活する辛さ 勝手が全く違う生活環境の中での気遣い 子どもの健康に関する情報が得られない苦勞
先が見えない生活への不安	避難生活の終わりが全く見えない不安
放射線への恐怖	どの情報が正しいのかわからない放射線そのものへの恐怖 いつかは福島県に戻らなければならないことへの恐怖
家族と離れて避難生活することへの辛さ	福島県にいる夫への心配 家族一緒に暮らせない辛さ 自分ひとりに押しかかる責任感による辛さ
避難しながら育児する辛さ	家族がいない中で育児する辛さ 育児している時の孤独感 子どもが体調を崩した時の育児の大変さ
人間関係の悩み	避難したことで差別を受けたくない 避難できない親族によそよしくなってしまう 自分のことを知っている人達がない 避難先で地元の母親に受け入れてもらえない
福島県で暮らすことへの決意	家族と一緒に暮らすために福島県に戻ろう 自分の体のことを優先して福島県に戻ろう 自分も家族も心身ともに限界だから福島県に戻ろう
福島県に戻ることに不安	放射線の状況がわからない福島県に戻るの不安
福島県に戻ることに切なさ	家族で住める避難先が見つからないから福島県に戻るしかない 放射線を気にする生活を送るのは辛い
避難生活の中での救い	同じ境遇の母親と出会えたことでつながりができた 放射線を気にすることなく生活できる解放感 被災者支援が充実していて助かった

ですぐ仲良くなっちゃうんですね、福島から避難しているってだけで。(D)」と語り、〈同じ境遇の母親と出会えたことでつながりができた〉ことが【避難生活の中での救い】となっていたことが示された。さらに、「普通の生活をここでしていいんだって思って(中略)やっと喪が明けたというかそんな気分だったですね。嬉しくて。(F)」と語り、〈放射線を気にすることなく生活できる解放感〉が得られたことが【避難生活の中での救い】となっていたことが示された。

c. 福島県に戻ってからの母親自身に関する思い(表7)

福島県に戻ってからは、10カテゴリー、17サブカテゴリーから構成された。

福島県に戻り、母親達と交流する中で、自分が想像していた放射線対策が実際と違うといった【放射線に対する認識の違いによる戸惑い】、〈毎日放射線の対応に追われ続ける苦しさ〉といった【放射線への対応の苦悩】を抱えながら、福島県での生活を再開していた。福島県で暮らすことを決意して戻ってきたが、〈放射線は大丈夫だと言われても信じられない〉と

いった【放射線への不安】や【放射線がある福島県で暮らすことへのもどかしさ】が生じていた。さらに、避難経験のない母親との【人間関係の悩み】が生まれていた。こうした中でも、〈家族と一緒に生活する大切さ〉という【福島県で暮らすことへの気づき】や、〈避難中に知り合った友達とのつながりがあるから頑張れる〉という【福島県で暮らすことへの支え】を得ていた。また、〈放射線を気にしすぎず自分ができることをするしかない〉という【福島県で暮らすことへの覚悟】を決め、福島県での生活を送っていた母親もいた。一方で、〈避難中母親としてやりきることができなかったから辛くなる〉という【母親役割が果たせなかったという後悔の念】や、福島県の放射線に関する情報に偏りがあるという【福島県の放射線に関する報道への不信感】を抱いていた母親もいた。

このうち、【放射線がある福島県で暮らすことへのもどかしさ】では、「今でも解消されていないので、できるならどっかに行った方がいいって思っちゃっている。(C)」と語り、〈福島県で生活している以上何も解消されない〉ことによるもどかしさや、「(中略)お弁当作って公園行って遊んで帰って来てとかよ

表7. 福島県に戻ってからの母親自身に関する思い

【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉
放射線に対する認識の違いによる戸惑い	自分が想像していた放射線対策が実際と違うことへの戸惑い 母親達の放射線の受け止めや対応への戸惑い
放射線への対応の苦悩	どのように放射線に対応したらいいのかわからない 毎日放射線の対応に追われ続ける苦しさ
放射線への不安	放射線は大丈夫だと言われても信じられない 一時でも福島県から離れて心身を保ちたい
放射線がある福島県で暮らすことへのもどかしさ	震災前のような普通の生活ができない 避難したいが再度避難する決断ができない 福島県で生活している以上何も解消されない 避難することを目標に今は耐えるしかない
人間関係の悩み	周囲の母親の境遇がわからないため会話の内容を気にする 避難経験のない母親に避難した事実は言えない
福島県で暮らすことへの気づき	家族と一緒に生活する大切さ
福島県で暮らすことへの支え	避難中に知り合った友達とのつながりがあるから頑張れる
福島県で暮らすことへの覚悟	放射線を気にしすぎず自分ができることをするしかない
母親役割が果たせなかったという後悔の念	避難中母親としてやりきることができなかったから辛くなる
福島県の放射線に関する報道への不信感	福島県の放射線に関する情報に偏りがあることに不信感がある

くやっていたんですけど、震災前は、今そういうわけに
いなくて。(E)」と語り、〈震災前のような普通の
生活ができない〉ことへのもどかしさが示された。また、【人間関係の悩み】では、「心配事とかを福島に
帰ってきたら誰に話しているのかよくわからない。避
難してたママには話せるんだけど（中略）同じお
友達と付き合っている。(F)」と語り、〈周囲の母
親の境遇がわからないため会話の内容を気にする〉、
「せっかくできたお母さんの知り合いなのに、その一
言でもしかしたらそっち（避難）組じゃないけれど嫌
だなあっていうのがあるから。きっと私言わないと思
います。(A)」と語り、〈避難経験のない母親に避難
した事実は言えない〉状況にあることが示された。

VI. 考察

A. 育児中の母親が抱いた主な思い

1. 子どもへの放射線の影響に対する思い

母親が、家族と離れて生活や育児への辛さを抱えな
がらも避難を継続し、福島県に戻ってからも子どもの
安全のために対処をしていたことは、避難前の子ども
にとって放射線は害という思いが根底にあったことが
推測される。現在、低線量の放射線によって受ける健
康被害についてわかっていない。また、福島原発事故
により拡散した放射性物質は、その半減期の長さから
将来長期にわたって残り続ける（中島、2013）ことか
ら、母親は、子どもの健康に影響してしまうのではな
いかといった不安を抱えながら今後も過ごしていくも
のと考えられる。このことは、本研究結果において、

子どもの将来に関連した放射線の影響や差別といった
母親の思いが示されたことから推測できる。また、
離乳食ができなかったという子どもに対する思い、
〈福島県で生活している以上何も解消されない〉とい
う母親自身に関する思いを持っていた母親は初めて
の育児経験だった。第1子の場合、母親は初めての経
験となるため戸惑うことが多く（庄司・谷口、1998）、
放射線の存在によって、母親の初めての育児がさらに
辛く苦しいものになっていた可能性が考えられる。他
の母親も、こうした子どもの放射線の影響に対する思
いを抱えつつも、子どもを守るために、それぞれがそ
れぞれの環境の中で、母親としてできることを考え対
処していた。このことは、母親の持つ力を示すもので
あると考えられる。

2. 人間関係に伴う思い

避難前では、周囲の母親から得た情報や動きから、
【子どもにとって放射線は害という確信】に至っていた
ことから、母親同士のつながりがあったと考えられ
る。しかし、避難中、福島県に戻ってからの2時
期で、【人間関係の悩み】を抱えていた。世帯外の
ネットワークの規模が大きいほど母親の育児不安が
低く（松田、2001）、3歳児を持つ母親にとって、育児
の相談相手の中でも友達の存在が大きい（河野・大
井、2014）ことが明らかにされているが、避難中、放
射線の心配から離乳食ができなかった初めての育児中
だった母親は、避難中も福島県に戻ってからも、避難
していたことを周囲の母親に言えなかったことから、
放射線に関することを含め育児や生活について相談で
きるような母親同士のつながりが限られ、辛く苦しい

思いを持っていたことが考えられる。また、初めての育児ではなかった母親も、福島県に戻ってから、周囲の母親の避難経験の有無がわからず会話の内容を気にするという悩みを持っており、放射線に関することを相談できず、辛い思いを抱いていた可能性がある。一方で、避難中、同じ境遇の母親とつながりを持つことができたことが救いとなり、福島県に戻ってからは、避難中に知り合った友達とのつながりが支えとなっていた母親がいた。放射線の問題と向き合いながら育児や生活している母親にとって、安心して話せる母親の存在は大切であることが示されたと考えられる。

3. 情報不足に伴う思い

避難前の母親は、放射線について不確かな状態だったことから、放射線に関する情報を十分得られなかった可能性が考えられる。このことは、福島原発事故による放射線に関する情報の錯綜（大津・宮崎，2013）や国や東京電力に対する不信、発信される情報への不信や放射線の健康影響に関する専門家間の見解の相違（辻内，2016）と関係していると推測され、放射線に関する情報の曖昧さがあったと考えられる。避難中、放射線が心配で離乳食ができなかったという子どもへの健康被害の不安が生じていた母親は、情報の錯綜によって、どの情報が正しいのかわからず【放射線への恐怖】を抱いていた。このことから、避難中であっても、放射線に関する情報の曖昧さがあったことが窺える。こうした放射線に関する情報の曖昧さが、放射線に伴う不安や戸惑い、もどかしさといった思いにつながった可能性がある。また、福島県に戻ってからは、情報の曖昧さに加え、放射線への対応に苦しみ悩み、放射線のある福島県で暮らすことにもどかしさを抱き、子どもに関する専門的な情報が提供されないことへの不満を持っていたことは、母親が知りたい情報を得られていない、あるいは、提供された情報が納得、理解できないことから、情報を提供する側と情報を受け取る側との間にズレが生じているとも考えられる。曖昧かつ不正確な情報によって、母親に育児や生活への負担が生じていた一方で、放射線に関する正確な情報を必要とし望んでいることが明らかになったと考える。

B. 県外避難を経験した母親への支援

福島原発事故による放射線の問題によって、環境はそれぞれ異なるものの、研究参加者である母親全員が放射線に関連した育児や生活への不安や辛さ、戸惑い、悩み等を抱いており、特に、初めての育児だった母親は心身ともに負担が大きかったことが推測される。しかし、こうした中でも、避難前、避難中、福島県に戻ってからの3時期において、母親それぞれが放射線への対応など何らかの対処行動をしていた。このことは、母親には不安や辛さ、困難を乗り越えることのできる力があることを示すものと考えられる。ま

た、思い通りにならない問題を解決するために、現実的な小さい目標に変えたり、信頼できる人の助言を得るといった対処行動を積極的にとることは、ストレスへの効果的な対処（宗像，1996）にもなる。さらに、母親の思いは、時間的経過とともに積み重なって福島県に戻ってからの思いとなっていることが推測される。これらのことから、支援者は、避難前からの母親の思いを理解した上で、母親が求めている放射線に関する情報を提供し、母親自身が得られた様々な情報の中から必要な情報を選択し対処できるように一緒に考えていくことが求められる。母親がこうした機会を得るためには、母親が相談できて支援を得られる環境、例えば、「ままカフェ」（ふくしま子ども支援センター，2017）のような、避難経験のある母親同士で語り合えたり、避難経験に関係なく母親同士が交流できる場を提供する必要があると考える。

情報に対する不信感（辻内，2016）や子どもの検査結果や状況を伝えてもらえていないという不満については、「放射線・放射能に関する知識、放射線の健康影響に関する知識が医療関係者に十分に浸透していなかった」（福島，2014，p.32）という福島原発事故対応の問題点に関係していることが推測される。曖昧かつ不正確な情報は、不信感や不満から母親の信頼を失うだけでなく、子どもの【放射線による健康被害への不安】を助長させる可能性がある。したがって、地域母子保健を担う保健師をはじめ、看護師や助産師、医師、臨床心理士、保育士といった、母親の支援にかかわる職種が放射線・放射能や被ばく医療、放射線の健康影響、疫学に関する知識を有する（福島）ことが求められる。母親の支援を深めていくためには、職種間での連携かつ情報共有が必要不可欠であると考えられる。

以上から、福島原発事故による放射線の問題によって育児や生活の中で生じている避難前からの母親の思いを理解した上で、放射線に関する必要な情報を提供しつつ、母親自身がよりよい選択ができるようにともに考えていくことが母親への一助になると考える。

VII. 研究の限界と今後の課題

本研究における7名の参加者から、避難前、避難中、福島県に戻ってからの3時期における思いが詳細に示されたことで、県外避難を経験した母親への支援を検討する手立てとなり示唆を得ることができた。しかし、自主避難という形をとった、避難指示区域以外の母親の思いに限定されることが本研究の限界である。今後の課題としては、時間的経過とともに変化する母親の思いを継続して明らかにするとともに、支援者側の思いにも焦点をあて、双方の思いから母親への支援を検討することである。

VIII. 結論

福島県外へ避難を経験した母親は、子どもの【放射線による健康被害への不安】の中、自分の判断に迷いながら【子どもの安全を守るための対処】をしていたものの、子どもらしい生活をさせることができない状況にあった。また、放射線の情報が十分に得られない、震災前のような生活ができない状況の中、放射線の対応への苦悩や戸惑い、【人間関係の悩み】等を抱えながら生活していた。以上から、県外避難から戻った母親の思いを理解した上で、放射線に関する必要な情報を提供しつつも考えるという支援の必要性が示唆された。

謝辞

本研究にご協力下さいました研究依頼機関の皆様ならびに7名の研究参加者の皆様、また、ご指導頂きました元長野県看護大学の清水嘉子教授、内田雅代教授、今井家子教授に深く感謝申し上げます。なお、本研究は、平成26年度長野県看護大学大学院看護学研究科における修士論文の一部を加筆・修正したものである。また、日本災害看護学会第17回年次大会において発表したものに加筆・修正した。

利益相反

利益相反なし

文献

福地成 (2012). 震災が養育環境に与えたもの。子どもの虐待とネグレクト, 14(1), 14-19.

ふくしま子ども支援センター (2017). センターの取り組み 県内親子支援. http://ccscd.beans-fukushima.or.jp/effort/prefecture_victim_support/ (2017.12.26)

福島靖正 (2014). 4 国の対応. 安村誠司編, 原子力災害の公衆衛生 福島からの発信 (初版) (pp.27-33). 東京: 南山堂.

畑村洋太郎・安部誠治・淵上正朗 (2013). 福島原発事故はなぜ起こったか—政府事故調核心解説

(初版). 東京: 講談社.

木脇奈智子・久保田真規子 (2013). 多様化する子育て支援の現状と課題 第2報—東日本大震災避難者に対するP市の事例から. 藤女子大学QOL研究所紀要, 8(1), 33-41.

河野古都絵・大井伸子 (2014). 3歳児をもつ母親の育児不安に影響する要因についての検討. 母性衛生, 55(1), 102-110.

松田茂樹 (2001). 育児ネットワークの構造と母親のWell-Being. 社会学評論, 52(1), 33-49.

宗像恒次 (1996). 最新 行動科学からみた健康と病気. 東京: メヂカルフレンド社.

中島宏治 (2013). 寄稿「究極の選択」を強いたのは誰か—なぜ原発賠償関西訴訟が提起されたのか. 森松明希子著, 母子避難, 心の軌跡—家族で訴訟を決意するまで (pp.144-164). 京都: かもがわ出版.

成井香苗 (2012). 避難生活と家族への心理的援助—震災と放射線不安の福島の支援報告. 家族心理学年報, 30, 45-58.

大津留晶・宮崎真 (2013). 東京電力福島第一原子力発電所事故後の福島県内の状況と現在の取り組み. 保健医療科学, 62(2), 132-137.

Sandelowski, M. (2000) / 谷津裕子・江藤裕之訳 (2013). 質的研究をめぐる10のキークエスチョン サンデロウスキー論文に学ぶ. 東京: 医学書院.

庄司順一・谷口和加子 (1998). 育児不安. 保健の科学, 40(4), 289-292.

辻内琢也 (2016). 6 安心神話と価値観の対立の根拠. 戸田典樹編著, 福島原発事故漂流する自主避難者たち—実態調査からみた課題と社会的支援のあり方 (初版) (pp.45-51). 東京: 明石書店.

八代千賀子 (2013). 第3回福島市子育て座談会—放射線不安と向き合った母親たち. Isotope News, 716, 83-88.

吉田浩子 (2013). 主任者コーナー シリーズ“放射線と向き合って”第3回 序. Isotope News, 716, 83.